紹　介

●松菊木戸公傳

木戸公傳記編纂所著

木戸孝允は世に維新三傑の一人と傳稱せらるゝ程の偉大なる政治家であるが未だ詳細なる傳記の世に出でなかつたのを遺憾とし故桂太郎氏等が大正元年編纂に着手し妻木忠太氏編纂主任となり、爾來各地に於ける、資料の蒐集に努め、夫れ等資料の中、主として自叙日記並に往復尺牘を根軸として研鑽し、傍ら先輩の談話をも參考して凡そ十年にして稿を終へ茲に本書を刊行するに至つたのである。全編を上下二冊とし、合せて二千一百餘頁の大部なもので、其の項目を家系と修養時代、勤王時代、維新時代、内政整理時代及び逸事（附松子夫人の事蹟）の五に分ちて詳細に其の生涯の事蹟を叙述してゐる。彼が長藩を背景として縱横に活躍した人であつただけ其の記事は多岐にして殆んど維新の全局面に亙つてゐるが、よく其間の史實を詳叙して而も冗漫に流れず、行文亦暢達である。本書は彼を通じて維新史の一面を闡明すると共に當時の局面に當つた大立物たる長藩の動靜去就をも明かにすることが出來て宛然一の幕末維新史とも云ひ得るものである（菊版二一八三頁、東京明治書院發行、價二〇・〇〇）〔松野〕

●幕末史概說

井野邊茂雄著

プラトンも敎ふる如く顧ることは進むことである。今日多數の人々が幕末維新の推移に多大の關心をつなぐ所以は畢竟現代日本の進路を其中に發見せんとするものに外ならぬ。然るにそれらの人々が稱して幕末維新の眞相なりとするものは往々にして假想せられたるそれに過ぎざる事を發見するのは歷史家の最遺憾とすべき處であらう。この時に當つて多年この時代の研究に從事せる著者がさきには「幕末史の研究」に於て特殊問題の鮮かな解剖を試み、今またこの新著によつてその一般推移を明か